一般演題（1B5-1）

頭部外傷後遷延性意識障害患者のQOLを高める看護
～iPhoneでのコミュニケーション～

古田　由美、土屋　郁恵、兼松　由香里、遠山　香織、浅野　好孝、篠田　淳

木沢記念病院 中部療護センター

【はじめに】コミュニケーションは、人間の日常生活に欠くことのできない基本的な欲求であると言われている。A氏は、自分から思いを発することができないが、質問に対しては理解し、離握手や眼球の動きでYes－Noを示すことが可能であった。そのため、コミュニケーション手段がとれないかと検討し、患者の希望もあり使い慣れたiPhoneを取り入れることとした。これを使用することで少しでも自分の思いを発することができれば、QOLの向上につながると考えiPhoneを打てる筋力と操作のできる指づくりを中心とした看護介入を行った。
【方法】iPhoneのタッチパネルを押す指を動かすための筋力や指づくりは、温浴刺激療法中に左手指や手関節の運動を施行。その後リフレソロジーを行う。iPhoneの文字入力では、左手関節と最も随意性が良好である左第3手指を介助で支え、伝えたい言葉や質問の答えの入力を促す。
【結果】左第3指が随意的に伸展し、関節可動域の拡大がみられた。またiPhone入力では日による差はあったが、タッチパネルを押したり離したりする動作や指を次の文字へと運ぶ時間が速くなり、入力できる文字数が平均1文字増加、入力時間が平均5分間の短縮がみられ、質問に対する答えを入力できることもあった。また、入力できることで笑顔がみられ、本人より「入力できて嬉しい」という気持ちが聞かれた。
【考察】本人より喜びの気持ちが聞かれ、QOLの向上につながる関わりができたと考える。
【結語】iPhoneを使用することにより、患者とのコミュニケーションを深めることが可能であった。